

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「当季雑詠」

畑打つや農婦背中に陽をためて

伊藤 たみ

(評)畑打つは春の季語、広い畑を農婦が鍬で打っているのを見ていると、気長い事のよ  
うな思いがするが、夕方になるとちゃん  
と打ち上げて帰ってゆく、大自然の中のかそ  
かな営み。畑打ちしている人に会うと、何  
となく親しみ深い思いがする。体全体に夕  
茜を受けた情景を想わせて、大地に淡い影  
を曳く、平明で誰にでも作れそうだが、意  
外に作れない。句表現の無欲は読後にさわ  
やかな真水の味を秘める。

凭れ合う放置自転車下萌ゆる

間 浩太

(評)放置された自転車が集められて一箇  
所に纏めてある。凭れかかっ倒れている自  
転車、その下に萌え出た春の草、放置され  
た時間の経過を示している。盗難車、置き忘  
れ、使用可能、不能を含め種々の車が含ま  
れている。経済成長の影にかくれた「勿体な  
さ」が雨露に晒されているのである。

笹鳴きやクロスワードを解きおれば

川村 博子

(評)笹鳴きは鶯のまだ完全には春の如く  
には囀らず、チ、チ、チと啼きは始める  
ことを云うが、作者は、クロスワードを解

きながら、笹鳴きの聞こえる場所に居る。  
クロスワードは、横縦のマス目に並んだ  
空白のマス目に、ヒントに基づいた文字  
を入れる言葉の謎遊びであるが、その最  
中に笹鳴きを聞いたという句意。鶯とい  
う第三者的な存在が刺激になって、キッ  
ト正解ができたであろう。

鉢植に袋かぶせり寒戻り

森元二美子

(評)春になって少し暖かくなりかけた  
と思う間もなく、また寒さがぶり返して来  
ることを俳句では「凍返る」というが、こ  
の句の「寒戻り」はそのことを指してい  
る。袋をかぶせて霜に傷まないように鉢  
植を護る、そんな女性らしい仕種、作者の  
花に対する気息を感じさせる句。

湧水や育む山葵青々と

筒井 肩躬

(評)山葵は一月頃の寒さの中で芽吹く。山  
中の溪間や日蔭の荒田跡等に自生するの  
で気付かれない場合が多い、根茎は辛くて香  
気があり、調味料として又漬物としても賞  
味されるが「青々と」とあるところから、も  
う既に手遅れの感じのする山葵である。

童心にかえりて飾る古雛

森岡 照月

(評)正岡子規の句に「雛あらば娘あらばと  
思いけり」という句があるが、子規には子供  
が居なかつたというから、この句は子供も雛  
もなかつた中で生まれた句であろうと推察  
するが、右の句はどう解すればよいのであ  
ろうか、雛を飾る子供が居ないのか、飾る古

雛の持ち主は誰なのか、童心にかえるのは作  
者自身かどうか、何か気になる句である。雛  
の置き方、飾り方によって又変わった句が生  
まれるように思うのだが。

京菓子も春立つ色となつてゐるし

岡本とも子

新しき絵馬に同姓あたたかし

片岡 包女

園児等の祈りの手より流し雛

大川 節弥

病院を出て啓蟄の陽をまとふ

刘谷 志津

はや伸びし長めカットに春の風

小島 良

春寒し見舞いて何を話そうか

川上こよね

啓蟄の日差し誘い出されたる

川村千因子

あれこれ通じる夫婦落の臺

井上 郁子

雛飾り賑わい戻る老舗街

松岡きよ子

退職の人にさくらの茶を送り

立木ゆう子

沈丁花おしゃべり好きと立ち話

中野 好子

梔音のリズムに乗りて山笑う

津田 久美

ふっされし絆を過去に落椿

友草 水月

人の世は情重たき落椿

楠目 哲郎

抱き変わり児の撮られて雛の前

竹崎 光子

人絶えて池に水なく寒椿

渡辺万利子

春の夜の書棚に古きブランデー

東谷 晴男

大岩のくぼみに座せる猫柳

弘瀬うき子

鶯に励まされおり畑を打つ

川村 愛

蹴引けば土ふくらみて春隣

藤田 里野

こだまして天地ゆるがす春の雷

筒井 一平

猫柳川の流れにさからはず

筒井 文

母留守の生家に置きけり蓬餅

松尾満津於

平成18年度

こども川柳年間優秀作品

入選作品

■最優秀賞

さんかん日 あたまのうしろ あつくなる

神谷小3年 坂本しおり

■優秀賞

思いやり 大切だけど 守れない

下八川小2年 宗我部有香

あいさつは 心のとびら 開くカギ

川内小5年 國澤 優花

運動会 子より母親 うきうきと

伊野小6年 高野 眸

■入選

つりをした なまずをつった おもかった

下八川小2年 宗我部浩大

がんばろう かんじをせんぶ おぼえたい

神谷小5年 細木 直輝

うるさいな 電車の中の わらいごえ

枝川小5年 石原 華倫

雨がふり 七色がさが くるくると

伊野小5年 山村 麻友

がんばれば どんなゆめでも かなうから

伊野小5年 田島 匠

夏休み 母の悲鳴が きこえるよ

伊野小5年 吉良あすか

※学年は、平成18年度中のものです。